

「学び・やり甲斐・ACTIVEプロジェクト」の指導内容を中心とした、 「話すこと・聞くこと」と「書くこと」の実践例 ～～（国語の基礎学力の定着に向けて）～～

山梨県立身延高等学校 国語科

（１）課題の内容

本校では、学びの基礎診断として基礎力診断テスト（Benesse）を導入している。基礎力診断テストでは、生徒の基礎学力の定着度が、学力到達ゾーン（CTZ）で図ることができ、その中で最下位層にあたるD3ゾーンに所属する生徒を0にすることを、学校全体の目標としている。また、生徒の学習状況を見ると、予習復習が習慣化していない、提出物が出せないなど家庭学習が確立されていない様子が見えてくる。授業や進路指導で生徒が書いた小論文を見ると、誤字脱字や文章のねじれが起こっていることなどから、本校の国語科では、国語の基礎学力の定着を課題としている。

（２）課題改善に向けた具体的な取組

基礎学力の定着に向けて、家庭学習の習慣化を図るために、全校統一で行う漢字テストや古文単語などの小テストの実施、漢字検定受検の奨励など、生徒が言葉を「書く」時間を多く持てるような取組を行った。また、Chromebookを授業に取り入れ、生徒が読み上げた道案内を聞き、画面の地図に道筋を書き込む言語活動を行うなど、授業にICT機器を取り入れることで、「話す力」「聞く力」を養う授業の工夫を行った。

（３）取組の成果とその要因

小テストに向けた学習用のノートや授業用ノートを見てみると、多くの生徒は家庭学習が習慣化し始めているようである。また、漢字検定の受検者、合格者数も、昨年度よりも増えており、生徒の中で「国語力」に対する前向きな意識が高まってきた結果であると考えられる。本校ではChromebookを始めとしたICT機器の環境が整いつつあり、他教科の授業でも多く取り入れられ、「話す力」「聞く力」を含む生徒のプレゼンテーション能力は、授業の工夫により高まってきていると感じる。

（４）取組の中で感じられた課題と考えられる原因

家庭学習が習慣化し始めているとはいえ、基礎力診断テストの学習状況アンケートの結果や、Classiの学習記録を見ると、依然として国語の学習時間は少ないままであり、「国語力」に対する意識が低い生徒がまだいることが分かる。小テストの不合格が続く生徒や、学習時間が極端に少ない生徒への手立てが課題になる。また、ICT機器に対する教員の知識や技術不足により、効果的な活用ができていない部分があるため、ICT機器を活用した授業作りも課題である。

（５）（４）で感じられた課題に向けての改善策（案）

進学から就職まで幅広い進路を考えると、漢字検定、文章検定などの資格取得に向けての取組をもっと積極的に行っていくことで、生徒のモチベーションを上げ基礎学力を定着させることができるのではないかと考える。また、ICT機器を活用した授業作りは、他教科の授業見学や、他校、他県の実践例を調べ、教科内の教員で情報を共有して一緒に授業を作っていくことで改善できると考える。